完了報告書（平成 24 年度）

提出者　川端　浩平

提出年月日　平成２５年１月３０日

【プロジェクト名】

和文　地域社会で不可視化された領域を考察するための＜方法としてのジモト＞

英文　Alternative approaches for researching invisible spheres in the local community

【メンバー構成】

研究代表者 川端浩平

幹事　森田次朗、渡邊拓也

メンバー　平田知久、越智正樹、孫・片田晶、芦田裕介、金泰植、轡田竜蔵、谷村要、松村淳、越智郁乃、知足章宏、知念奈美子、田恩伊、岩下史、大前悠、瀬戸・徐・映理奈、山口健一、安井大輔、清水友貴恵、石井和也、稲津秀樹

【ねらいと目的】（600 字程度）

本プロジェクトは、地域社会で親密圏と公共圏が再編成される過程において不可視化されている領域を「ジモト」として考察することを通じて、これまでの地域社会を対象とした研究調査において焦点を当てられることがなかった、もう一つのジモト像を様々な場や人びとの営みから描き出すことを試みる批判的アプローチである。特に、以下に強調する２点を軸に、方法としての「ジモト」の枠組み構築を目指している。本プロジェクトが対象とする地域社会をめぐっては様々な研究蓄積があり、その大半は、地域社会で生活する人びとや資源に着目しつつ、それらの可能性をエンパワーする視座からの取り組みである。しかし、第一に、それらの研究においては、地域社会に存在するネガティヴな側面を描いてくることはなかった、もしくは捨象してきた。第二に、地域社会という概念が社会統合や包摂の意味合いを持つ場面では、マイノリティの存在が認識されていない。マイノリティの存在そのものがある種の地域資源とみなされる場合もあるが、その場合には当該地域社会もしくはホスト社会の外部に位置づけられるのであり、地域社会そのものの変容という認識とは結びつきにくい。

以上のような問題意識を踏まえて、本プロジェクトでは、申請者と研究分担者たちがこれまで関わってきた研究調査の事例や運動の実践の場を通じて携わってきた地域社会とともに、それぞれの出身地や現在生活している地域社会など、何かしらの地縁を有する場やそこで生活する人びとを対象としたフィールド調査を行ってきている。ただし、ジモトという領域を明らかにするための実態調査ではなく、より包括的かつ多角的な視点から地域社会をめぐる現象を批判的に分析する方法としてのジモトに関する理論的枠組みの構築をめざす。

【活動の記録】

研究会・ワークショップの場合は、開催年月日、報告者と報告題等
調査の場合は、調査年月日、調査者、調査地、調査目的等
その他の活動も含めて、研究期間中の活動について簡潔に記してください。

各メンバーは、下記の調査テーマに従ってフィールド調査を行い、その成果は、下記の研究会と報告書（別添）を通して公表している。

【調査テーマ】
轡田：地元で平凡に生きること（岡山県北部の中山間地で生活する若者の労働や消費などをめぐる世界観）
芦田：田舎に滞留する若者（岡山県北部の農家のセガレの世界観）
森田：フリースクールに居場所を見出した若者（京都／大阪）
川端：地域表象が前景化することによって、描かれることのないマイノリティが抱える問題（岡山市）
金：参政権（韓国）をめぐり現れる「祖国／ジモト」についての語りと政治（ソウル／東京）
孫：在日朝鮮人の社会運動とアイデンティティの語りのなかのジモト（大阪府吹田市など）
谷村：アニメ『らき☆すた』を用いたまちづくりと聖地巡礼（埼玉県鷲宮町）
平田：KEY 半島（紀伊半島）における観光戦略と聖地巡礼（和歌山県和歌山市）
渡邊：大曽根商店街（オズモール）のまちづくりと失敗（愛知県名古屋市）
松村：地方都市で「建築家」を志す人びとの自己実現と世界観（香川県高松市）
稲津：移動と空間管理（マイノリティ）

【研究会】
■６月８日
・川端浩平「越境からジモトへ」
■７月２０日
・稲津秀樹「失われた「まち」？――「震災」後の神戸長田をめぐる表象を事例に」
■１２月７日
・渡邊拓也「ローカルエリートからローカルセレブリティへ――大曽根商店街（名古屋）」
■１月１８日
・松村淳「建築家の職業アイデンティティの構築をめぐって」

【成果の概要】（800 字程度）

本ユニットは、地域社会において親密圏と公共圏が再編成される過程において不可視化される領域を「ジモト」として考察する批判的なアプローチから身近な世界の問題を客観的に把握、公共化することを目指した。フィールド調査に基づいたジモトをめぐる論考から明らかになったのは、いわゆる地元志向現象（エンパワメント表象）によって何が不可視化されているのだろうかということである。それぞれ、生活者（利害関係者）として身近な世界の考察を通じて明らかになったのは、地元志向という現象は決して地域や人びとの実態を反映したものではないということである。

川端は、「越境」の体験を通じてジモトという視座が立ち上がってくる様子について描写しつつ、その理論的射程について論じた。これがこのワーキングペーパーの議論全体の基盤となる。

渡邊は、失敗と見なされるようなまちづくりのケースから、政策論的アプローチ等では見えてこないローカル社会特有の言説ロジックと、その構造的変容について描出した。

松村は、「建築家」というどこかアーティスト性を帯びた称号に対するアンビバレントな態度が、地方都市の職業アイデンティティをめぐる言説において顕在化する様子、およびそれとグローバル化との関連について考察した。

そして稲津の論考は、グローバルな移動の自由の増大をめぐる夢想と 9.11 以降の現実との大きな乖離について、つまりとりわけ地域においてはエスニシティとナショナリズムの言説がいまだ監視装置として作動しつづけるという現状について注意を喚起している。

我々はエンパワメントの言説が掲げるような将来のビジョンや希望を、ジモトに見出しているわけではない。執筆者たちは当該地域との関係性が深いゆえに、地に足のついた批判的な考察を進めることを可能としている。むしろ本研究ユニットを通じて明らかになったのは、地元志向現象には生活当事者（利害関係者）の視点が欠如しているということである。フラット化する現実（グローバル化）に対する地元志向現象をめぐる言説が要請されているが、その過程で、不可視化される変数があって、それぞれが異なる変数から不可視化されるジモトの領域を明らかにすることを試みた。つまり、階層、地域性、マイノリティ、ジェンダーといった負の属性が交錯する領域が切り離されるのである。ジモトという視座の導入は、それら隠された問題を再び拾い上げるという重要な役割を果たすだろう。

【通信欄】